二〇一二年度大学入試センター試験　解説〈古典〉

第3問　古文　只野真葛『真葛がはら』

［出　典］

『真葛がはら』は、江戸時代後期（文化十三年・一八一七年）に、只野真葛という女性がそれまで書きためていた随想・紀行・説話などをまとめた著作集である。仙台藩江戸屋敷の藩医工藤平助の娘として生まれた真葛（工藤あや子）は、父をはじめとする家族が高い教養をもつ人々であったことや、父親の知己である大名・経世論者・蘭学者・国学者・通訳・役者など多方面の人々との関わりもあって、文化的に豊かな環境の中で成長した。真葛は仙台藩江戸屋敷などに奉公した後、三十五歳で只野氏（この人も漢詩や謡曲などをたしなむ人であった）に嫁して仙台へ下り、仙台周辺の旅の紀行や耳にした説話を書き留めるようになる。その後、父・弟・夫が亡くなり、自身も五十歳に達すると、亡き夫が残した「聞き伝へしことの昔語りを書き留めよ」という言葉もあって、『真葛がはら』をまとめ、著述に精力的になった。真葛はその後書き上げた『独考』を通して、当代随一の作家と言える滝沢（曲亭）馬琴とも親交を持つことになり、作家・学者として徐々にその名を知られるようになる。近年、近世女性作家の発掘と研究が盛んになる中、最も注目される作家の一人である。

なお、『真葛がはら』は、二〇一一年一〇月に実施された、東進の第五回センター試験本番レベル模試で出題されている。

［通　釈］

この陸奥の国の繁華な地域に程近い、中田という所に住む人がいた。代々鷹を飼うことを生業としながら、身分は賤しいものの、志があって、昔の風俗に心ひかれ、いろいろと学びたいと思う中で、字を書くこと［＝書道］を、特に好んでいた。しかし、印刷本で伝わっている書のほか、師とする人もいない山奥で、（学びようもなく）むなしく暗い気持ちで過ごすよりは、京の大都に上って、高雅な筆づかいをもはっきりと見きわめたいと、突然に心を奮い立てて、岩や黒土を踏み分け、文化四年という年の三月頃、（京都に）上ったが、世事に疎い田舎者［＝鷹飼い］が想像していたのとは違って、高貴な皇族の中に、こうだ［＝書を伝授してほしい］と頼んで近づけるような手がかりもなく、（自分のような）極めて賤しい身分の者には、（書道の）御秘伝が授けられることもないと聞いて、勇み立っていた気持ちも萎えて落胆したが、（かといって）この先どうしたらよいかも思いつかず、（都の高貴な方に教えを

乞おうなどと）身分不相応に思い立ったことを思うと、井戸に住む鮒が大海原に泳ぎ出てしまったかのようである。（また）このようにして（何一つ成し遂げることのないまま）むなしく（陸奥に）帰るようなことを思うと、雷さまの側にいる獣が、（乗っていた）雲においてきぼりにされたのも同然である。実にきまりが悪いと気落ちしながら、（都の）名所などを見て回って（宿に）籠もっていた。

そもそもその鷹飼いは、石井了陸という人のもとに泊まっていた。この家に、思いがけない折々に持明院の宮に仕える人が集まって来て、酒を飲み、話などをする時に、「この田舎の人［＝鷹飼い］は、こうこうこのような志がございまして、はるばる（都へと）上って参りましたが、志を遂げずに帰るようなことを、たいそう嘆いております」と、主人［＝石井了陸］が語り出したのを、その宮家に仕える人がこまごまと聞いて、「たいそう気の毒なことであったなあ。普通ならかなえられないことではあるけれど、志の深さは、身分が高いも低いも関係のないものだ。私がうまくいくようにお引き受けしよう」と、請け合って下さったので、（鷹飼いは）たとえようもないほどに喜んだ。（その後、）この人［＝宮家に仕える人］のはからいによって、畏れ多い高貴な方の御前などに参上することもお許しが出て、入木という書法を（高貴なお方が）御みずから伝えて下さりなどして、かねて願っていた以上に成果を上げることができたので、（鷹飼いは）身に余る光栄だと思った。（そのように思って鷹飼いが）陸奥の田舎に下る折、例の宮家に仕える人が、この人［＝鷹飼い］のまたとないほどの志をお褒めになって、琴を贈って下さったが、弦が一筋［＝一本］の琴であった。「この琴に和歌を添えよ」と（宮家に仕える人が）言うので、（鷹飼いが詠んだ歌は）

（風流を）一筋に思う心は美しい琴の（一筋の）弦にこと寄せつつ弾き伝えましょうか。

（鷹飼いは）家なども、もともとことさら広くきれいに作って、周りには松をぐるりと植えて、移りゆく月日ごとに賞美していたが、このたびお上から蝦夷［＝北海道］の千島に防守［＝防衛兵］をお置きになるという通達があり、真っ先にこの陸奥の国からも（兵を）お出しになるために、（その鷹飼いが）その員数の一人に指名されて、（蝦夷へと）出立することとなった。（鷹飼いは）「（千島へ）行って帰って来るまで、そのような広い家に女子供だけを置いておいたのでは（家を）守ることはできない」と思って、家を売り、女子供は人のもとへ預けて出かけた。その（折の鷹飼いの）気持ちになり代わって（私が詠んだ歌は）、

（お上の仕事だと思えば）家を出て行く甲斐もあると思ったが、（帰る）家もなくなって出かけるのだから何の甲斐もない。

（両目から）二筋に落ちる涙も（例の）一筋の美しく小さな琴に流したのだなあ。

その琴は、昔在原行平中納言が、流刑に処せられて須磨にいらっしゃった時、庇［＝小屋根］の杉を風が吹き落としたが、その形が面白かったので、くしげの箱に入っていた元結の糸を一本引き渡して、奏でなさったことから伝え始まって、今も伝わっているのだということである。

［解　説］

問1　語句の解釈の問題。

必修単語・文法の知識だけでなく、漢字の当てられ方や前後の脈略も見て解く必要がある。

(ア)　標準

「高き手ぶりをも見あきらめばや」の解釈として適当なものを選べ。

「高き／手ぶり／を／も／見／あきらめ／ばや」と単語分けされる。

まず着眼したいのは、**願望の終助詞「ばや」**である。これは自己の願望を表して「～したい」と訳すので、これだけで正解は①と⑤に絞られる。

次にポイントになるのは、**「見あきらめ」**の「あきらめ」。「あきらめ」は、動詞「明らむ」の未然形で、「明らかにする・はっきりさせる」の意。よって**正解は⑤**。

(イ)　標準

「いとはしたなりと思ひ屈しつつ」の解釈として適当なものを選べ。

「いと／はしたなり／と／思ひ屈し／つつ」と単語分けされる。

冒頭の「いと」の解釈は①～⑤まですべてＯＫであるから、ポイントとなるのは**「はしたなり（端なり）」**という形容詞であるが、これは形容詞**「はしたなし」**と同意で、「みっともない」、または、「中途半端だ」の意である。よって、正解は②・④・⑤に絞られる。次にポイントとなるのは**「思ひ屈し」**であるが、これは「屈ず（くんず）」や、現代語「屈する」が「くじける・気がめいる」等の意であることから考えて、同じ「屈」の字が当てられている「思ひ屈す」も同様の意味であると考えてよいであろう。よって、「いらだつ」としている②や「腹を立てる」としている⑤ではなく、「気落ちする」としている**④が正解**である。

(ウ)　基本

「本意にもこえて事なりぬれば」の解釈として適当なものを選べ。

「本意／に／も／こえ／て／事／なり／ぬれ／ば」と単語分けされる。

ポイントは、重要単語の**「本意（ほい）」**で、これは「本来の願い・もともとの目的」といった意味であるので、ほぼこれだけで正解は②とわかるが、

③・⑤も許される範囲の訳といえる。①の「想像」では主体性が弱い。④の「思いつく」は誤り。もう一つのポイントは「**事なり**」。これは「事成り」の字が当たると判断して、「事が成就する」の意と考えたい。「事」が体言であることから、接続的に見て「なり」を断定の助動詞と考えた受験生もいるかと思うが、断定（だ・である）では文意が通らない。傍線部(ウ)の直前に、「鷹飼いは入木という書法を高貴な方から直接伝授された」とあるから、傍線部(ウ)が「願っていた事（＝都で書道を学びたいという願い）が成就した」の意であると考えるのが文脈から見てふさわしい。これに最も近いのは②の「成果を上げることができた」であるから、その点からも**正解は②**であることが確かになる。

正解　(ア) 20　⑤　(イ) 21　④　(ウ) 22　②　（各5点）

問2　文法（「れ・なり・に・る」の識別）の問題。　基本

波線部a～dの文法的説明の組合せとして正しいものを選べ。

選択肢にある意味から見て、aの「**れ**」は助動詞「る」（aの「れ」は連用形）であることになるが、これが受身であるか尊敬であるかは文意から判断するしかない。本文を読み進めると、直前の「うけがは（＝請け合う）」の主語が「宮人」であり、この「宮人」の動作には、Aの歌の前の行に「めで給ひて、琴を送られしが」とあるように、「給ひ・れ」のように尊敬語が使われているので、aの「れ」も尊敬であると判断すべきだとわかる。しかしここはやや面倒なところなので、早く解こうと思うならば、aはひとまず置いておいて、b～dを先に解くほうがよい。

bの「**なり**」は、**体言（琴）に接続**しているので、**断定の助動詞**である。伝聞・推定の助動詞「なり」は、主に終止形に接続（ラ変型活用語には連体形に接続）し、体言には接続しない。「なり」の識別は受験生にとって必修である。

cの「**に**」は、「にけり」の形で使われている。「に」の識別も受験生にとっては必修だが、「**にき・にけり**」のように直後に過去の助動詞を伴っている場合、「に」は**完了の助動詞**「ぬ」の連用形である。

dの「**る**」は、**エ段の音に接続**していることから、これが**サ未四已（サ変の未然・四段の已然に）接続**をする**存続・完了の助動詞**「り」の連体形であることも、やはり受験生にとっては必修事項である。dの直前の「給へ」は、四段活用動詞「給ふ」の已然形である。「給ふ」は尊敬語の場合には四段活用で「給は／給ひ／給ふ／給ふ／給へ／給へ」、謙譲語の場合には下二段活用で「給へ／給へ／〇／給ふる／給ふれ／〇」と活用する。また、「給ふ」に似た動詞に「給はる」（いただく）があるが、これは四段活用で「給はら／給はり／給はる／給はる／給はれ／給はれ」と活用する。つまり、「給ふる」や「給はる」が一語ということはありうるが、「給へる」で一語の動詞ということはありえないのである。

よって、b～dで**正解は⑤**と決まり、文意から判断しなくてはならないaは解かなくても済んでしまうのである。

正解　23　⑤　（5点）

問3　内容説明の問題。　応用

傍線部X「行く先をようもたどらで」とあるが、この部分から陸奥の鷹飼いのどのような一面が読み取れるか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Xは「行く先／を／よう／も／たどら／で」と単語分けされる。

「よう」は「良し」の連用形「良く」のウ音便化したもの、「たどら」は現代でも使う「辿る」（行くえやありかを探し求める）の未然形、「で」は「～しないで」と訳す打消の接続助詞であるから、傍線部は「行く先をよくもさぐらないで」といった意味になる。

これは、都に出た鷹飼いが進む道を見失って途方に暮れていることを言っているようであるが、鷹飼いが上京する様子については、傍線部の直前、「ゆくりなく思ひおこして～はやりかなりし心もしなへうらぶれつつ」に書かれているので、この箇所を解釈してみよう。「ゆくりなく」は「思いがけず・突然」の意の形容詞「ゆくりなし」の連用形、「まゐのぼれ」は「参上る」の已然形、「わき知ら」は「分き知る」（わかる）の未然形、「山がつ」は「木こりや猟師など身分の低い者」のことでここでは鷹飼いのこと、「おしはかり」は「推し量り」（推量）のこと、「たがひ」は「違ふ」の連用形、「宮」は「皇族・皇族の屋敷」、「かく」は「こう・このように」の意の副詞、「たづき」は「手段・手がかり・見当」といった意味の名詞、「至れる」は「到達する・極まる」等の意の動詞「至る」の已然形「至れ」に存続・完了の助動詞「り」の連体形に「る」が接続している状態、「いやしき」は「みすぼらしい・身分が低い・不思議だ」といった意味の形容詞「いやし」の連体形である。また、「御伝へ」は前後の文意から「高貴な人から伝授される書道の秘伝」のこと、「はやりかなり」は現代語の「心がはやる」などという言い方から「気持ちが急いで勇み立つ」ような感じ、「しなへ」は現代語の「しなう・しなる」等から「柔らかく曲がる」の意、「うらぶれ」は現代語の「うらぶれる」と同様に「しょんぼりする・落ちぶれてみじめな様子になる」の意だと、それぞれ推測したい。

よって、傍線部の前の数行は、「突然に心を奮い立てて、岩や黒土を踏み分け、文化四年という年の三月頃、上京したが、世事に疎い田舎者［＝鷹飼い］が想像していたのとは違って、高貴な皇族の中に、こうだ［＝書を伝授してほしい］と頼んで近づけるような手がかりもなく、（自分のような）極めて賤しい身分の者には、（書道の）御秘伝が授けられることもないと聞いて、勇み立っていた気持ちも萎えて落胆した」といった意味になる。つまり、鷹飼いはとりあえず都に行けば高貴な人から書道の秘伝を受けられると安易に推量して突然に上京したが、高貴な人と知り合うつてさえなく途方に暮れた、ということなのである。

この内容を踏まえて選択肢を見ると、**正解の②**は「現実的な手段をあらかじめ検討せずに」は本文の「おしはかりとはたがひて」、「突然思い切っ

た行動を取ってしまう」は、本文の「ゆくりなく思ひおこして」などから考えて矛盾がない。

①の「いきなり高貴な宮家に押しかけてしまう」は、本文にそのような事実が書かれていない。③は、本文八行目に「名所など見めぐり」とはあるものの、「夢をあきらめ」て「都見物に興じて自分をごまかす」とまでは書かれていないので誤り。④は、本文五行目に「高き宮のうちには、かくと言ひよらんたづきもなく」とあるものの、「怖じ気づいてしま」ったとは書かれていないので誤り。⑤は、「あきらめの悪いところがある」が、そもそも傍線部Xが表す「途方に暮れて」困っている感じとはほど遠い。

正解　24　②　（7点）

問4　心情説明の問題。　標準

傍線部Y「いと不便なりつることかな」とあるが、この言葉には宮人のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部Yは「いと／不便なり／つる／こと／かな」と単語分けされる。

「いと」は「たいそう・とても」の意の副詞、「不便なり」は「不都合だ・良くない」、または、「気の毒だ」と訳す形容動詞「不便なり」の連用形、「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、「かな」は詠嘆の終助詞であるので、傍線部Yは「たいそう不都合な（気の毒な）ことであったなあ」という意味になる。

人の心情を問う問題では、その人の会話部分に着目することが重要で、傍線部Yに続く会話の部分を見ると、宮人は「普通ならかなえられないことではあるけれど、志の深さは、身分が高いも低いも関係のないものだ。私がうまくいくようにお引き受けしよう」と言っている。「おしなべて」は現在と同様に「一般に・総じて・すべて」といった意味、「いやしき」は「身分が低い・みすぼらしい」等の意の形容詞「いやし」の連体形で、「高きいやしき」は「（身分の）高き者いやしき者」の意、「けじめ」は現在と同様に「区別・隔て」のことである。「ことと り」は必修語ではないが、この宮人の言葉を聞いて、鷹飼いが「うれしきことたとへんものなし」と思っているのであるから、「ことと り」は「高貴な人への仲介を引き受ける」といった意味であろうと推測したい。「事取る」の字を当てれば、「受け取る・引き受ける」の意と考えられるだろう。つまり、宮人は鷹飼いや石井了陸に対して不快を感じてはいないのである。よって、その点から見て、②「もどかしく思う」、③「当惑する」、⑤「煩わしく思う」は誤りであることになる。

④は、まず「鷹飼いから……打ち明けられた」とある点が大きな間違いである。宮人は「あるじ」の石井了陸が言ったことを聞いて「不便なり」と思っている。また、「どうすることもできないものだ」も、なんとかしてやろうと請け合っている宮人の態度と矛盾していて正しくない。**正解は①**

であるが、これは、「あるじ」の話した内容と矛盾がなく、「同情する気持ち」も、「不便なり」の「気の毒だ」の意味と合致するので、間違いがない。

正解　25　①　（7点）

問5　和歌の説明の問題。　標準

A～Cの和歌に関する説明として最も適当なものを選べ。

まず、Aだが、鷹飼いが都を去るに当たって宮人が琴を贈って「これに歌をそへよ」と言ったのであるから、歌を詠んだのは鷹飼いである。鷹飼いは宮人に対して「これに歌をそへよ」と命ずることのできる立場にはない。よって、①は歌の詠者を宮人としているので誤り。また、Aの歌の詠者が鷹飼いならば、「ひきや伝へむ（ひき伝えようか）」の「ひく」の主体は詠者本人である鷹飼いであるから、②がいうように「ひく」を掛詞ととって、宮人が「引き立てて優遇する」という意味にとることは、「ひく」の主体が違っていて無理がある。しかも、宮人は鷹飼いを「引き立て」たわけでもない。

また、BとCだが、これらは直前に「その心にかはりて」とある。さらに前に書かれているのは「家をば売り、女子は人のもとに預けて行く」人、つまり、鷹飼いに関することであるから、「その心」とは「旅立つ折の鷹飼いの心」と考えるべきである。よって、BとCは、鷹飼いに代わって誰かが詠んだ歌であり、「鷹飼いが妻子になりかわって詠んだ」とする⑤は誤りである。

Bの歌の「家なくなりて行けばかひなし」は「家がなくなって出かけるのだから何の甲斐もない」といった意味で、これは、帰る家を失ったことを悲しんでいるのであり、③が言うように「売りに出した家が任務を終えて戻ったときにはなくなっているかもしれない」と心配しているわけではない。正解は④で、これは詠者の説明が正しく、歌の内容説明も大きく本文内容と矛盾することがない。「思いがけない事態が発生」は、鷹飼いが蝦夷の千島に防守となって行かねばならなくなったことをいう。和歌の問題ではあるが、詠者（主語）や、本文内容との合致を確認すれば解答できる問題である。

正解　26　④　（8点）

問6　表現の特徴と内容に関する説明の問題。　応用

この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適当なものを選べ。

①は、「井に住む鮒」や「鳴る神につく獣」のたとえが、家を手放すこととは無関係であるので、これらを関係づけて説明しているのが誤り。文章全体を「滑稽・笑い」といった表現で説明している点も正確ではない。

②は、まず「石井了陸は鷹飼いを『田舎人』として格下に見ている」が誤り。石井了陸は鷹飼いを助けてやってほしいと宮人に相談しているのも同然で、鷹飼いを格下に見下してはいない。また、鷹飼いには「身分に変化が訪れ」てはいないし、「立身出世をとげて」もいないので、それらの説明も正しくない。

④は、「貴族社会に積極的に溶け込んでいく」が誤り。**問3**の解説でも触れたように、鷹飼いは高貴な人と知り合うつてさえなく、石井了陸のおかげでなんとか宮人を通して貴人に近づくことができたのであり、それらの経緯を見るに、「貴族社会に積極的に溶け込んでいく様子が示される」とは言い難い。

⑤が言っている「学ばまく欲りする」「踏みさくみて」「むかし行平の中納言、流されて須磨におはせし時」は、筆者が引用している表現である。そこには筆者の古典の教養が表れているとは言えるだろうが、鷹飼いの「古代の文化にあこがれる」性格が表れているわけではないので誤りである。

正解は③で、これは、「一念発起し」た様子が「ゆくりなく思ひおこして」であり、一度は「しなへうらぶれ」て落胆したものの、結局は思った以上の成果を上げて「うれし」となったという説明なのであるから、本文内容と照合しても、ここに間違いはない。また、本文後半には、鷹飼いが「公(幕府)」の方針で「蝦夷が千島」という「辺境」に行かされることになったことが書かれているが、家を売り、妻子と別れる鷹飼いの心情は全く書かれてはいない(その悲しい心情を察して代弁しているのが筆者の二首の和歌なのである)。よって、この部分に関する③の説明にも誤りはない。

なお、「**表現の特徴**」の問題では、①「人生の機微が伝わる」、③「かえって現実の厳しさが際立ち、人生の悲哀が伝わってくる」、⑤「性格が顕著に示され・印象的にとらえられている」等、読者が受ける印象について書かれている部分については検討する必要がないと考えてほしい。読者がどのように感じるかは、その読者次第であるからである。それらに惑わされることなく、あくまでも、**選択肢に書かれている内容と本文内容との照合によって、矛盾のない選択肢を正解とする**べきである。

正解　27　③　(8点)

第4問　漢文　孫宗鑑『西畋瑣録』

［書き下し文］

東坡元豊の間に御史の獄に繋がれ、黄州に謫せらる。元祐の初め、起こされて登州に知たりて、未だ幾ならずして、礼部員外郎を以て召さる。道中、偶当時の獄官に遇ふに、甚だ愧づる色有り。東坡之に戯れて曰はく、「蛇有りて螫みて人を殺し、冥官の追議する所と為り、法は死に当たる。蛇前み訴へて曰はく、『誠に罪有り、然れども亦た功有り、以て自ら贖ふべし』と。冥官曰はく、『何の功なるか』と。蛇曰はく、『某に黄有り、病を治すべし、活かす所已に数人なり』と。吏考験するに、固より誣ひざれば、遂に免るるを得。良久しくして、一牛を牽きて至る。獄吏曰はく、『此の牛触きて人を殺す。亦た死に当たる』と。牛曰はく、『我も亦た黄有り、以て病を治すべし、亦た数人を活かす』と。良久しくして亦た免るるを得。獄吏一人を引きて至る。曰はく、『此の人生くるとき常て人を殺すも、幸ひにして死を免る。今当に命を還すべし』と。其の人倉皇として妄りに亦た黄有りと言ふ。冥官大いに怒り、之を詰りて曰はく、『蛇黄・牛黄皆薬に入ること、天下の共に知る所なり。汝は人たり、何の黄か之れ有らん』と。左右交訊ふに、其の人窘しむこと甚だしくして曰はく、『某には別に黄無し。但だ些かの慚惶有るのみ』と」。

［通　釈］

蘇東坡は、元豊年間に（讒言にあって捕らえられて）御史台に投獄され、黄州に流された。（その後）元祐年間の初めに許されて（復権し）登州の知事となり、まもなく召し出されて礼部員外郎となった。（都に戻る）道中、たまたま（かつて自分を取り調べた）当時の（御史台の）獄官に出会ったところ、（獄官は）ひどく恥ずかしそうな素振りであった。蘇東坡は戯れに彼に向かって言った、「（ここに）蛇がいて、噛んで人を殺し、冥界の裁判官に生前の罪を裁かれて、死罪の判決を受けた。（そのとき）蛇は進み出て（裁判官に）訴えて（こう）言った、『たしかに（人を殺したという）罪はあるのですが、私には功績もあって、自分自身で罪を償うことができます』と。冥界の裁判官は言った、『何の功績があるというのか』と。蛇が言った、『私には薬効があり、病気を治すことができ、（治して）生かした人間はすでに何人もあります』と。役人が取り調べたところ、もともといつわりではないので（蛇の言ったとおりであり）、結局罪を免れることができた。しばらくして、（役人が）一頭の牛を引いてやってきた。牢役人が言った、『この牛は人を突き殺しました。（よって）これもまた死罪にあたります』と。（そこで）牛が言うには、『私もまた薬効があり、病気を治すことができ、（蛇と）同様に何人か（治して）生かしました』と。しばらくして（取り調べた結果、これも）また死罪を免れることができた。だいぶ経ってから、牢役人が一人の人間をつれてやって来た。（牢役人が）言うには、『この人間は生前かつて人を殺しましたが、運よく死罪を免れました。（ですから）今（死罪に処して）命をさし出すべきかと思います』と。その人はあわてて苦しまぎれに（自分にも）また薬効があると言った。冥界の裁判官はたいそう怒って、その人を責めとがめて言っ

た、『蛇黄や牛黄がいずれも薬の部類に入ることは、世間では誰もが知っている。（しかし）おまえは人間である、何の薬効があるというのか』と。（裁判官の）左右の役人がかわるがわる問いただすと、その人はひどく苦しげに言った、『私には別に何のコウ（＝薬効）もありません。ただいささかの慚コウ（＝恥じて恐れ入る気持ち）があるばかりです』」と。

［解　説］

問1　語句の意味の問題。　(1)　**基本**　(2)　**基本**

傍線部(1)「未〻幾」・(2)「交」の意味として最も適当なものを、それぞれ選べ。

問1は、四年連続で語句の意味の問題であった。二〇〇九年度は「寧歳」と「相類（相類す）」、二〇一〇年度は「動（ややもすれば）」と「是」、二〇一一年度は「偏廃」の「偏」と「所以」である。

(1)「**未〻幾**」は、送りがながついていないので、読めるかどうかである。「**未**」が**再読文字**「**いまダ…ず**」であることは言うまでもないが、問題は「幾」で、これは一文字でも、国公立二次では読みの問題に出るレベルではあるが、よりふつうには「**幾何**」か「**幾許**」で「いくばく（＝どれほど。どれくらい）」と読む。「いくばく」そのものは活用しないから、断定の「ナリ」をつけて、「いまだいくばくならず」、さらに下に続けるために接続助詞「シテ」をつけて、「いまだいくばくならずして」と読むことになる。意味は「まだどれほどもなくして」ということであるから、**正解は⑤**の「まもなく」である。

(2)「**交**」は、「訊ふ」という動詞を修飾しているから副詞で、「**こもごも**」と読む。「交互に。入れかわりたちかわり」という意であるから、これは、**正解は②**「かわるがわる」である。「交互」という語が連想できれば容易な問題である。③の「立て続けに」とか、④の「手を替え品を替え」では、異なる者が「交互に」のニュアンスとは微妙に違っている。

正解　(1)　28　⑤　(2)　29　②　（各4点）

問2　返り点の付け方と書き下し文の組合せの問題。　標準

傍線部A「有蛇螫殺人、為冥官所追議、法当死」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを選べ。

この形の問題は、センター漢文では頻出する形なのであるが、これは、傍線部に返り点がない形でいろいろな読み方の選択肢を作りたいという狙い

であって、返り点の付け方が正しいかどうかを判断させる狙いはゼロである。つまり、返り点は読み方どおりに付いているので、それをチェックすることは時間の無駄ということである。

ポイントは、書き下し文と、その読み方をした場合の意味が文脈にあてはまるかどうかである。そして、最も大事なのが、傍線部の中に、何か句法上の読み方の型がないかということである。

この場合、傍線部の中間あたりにある、「為…所…」の形に着眼したい。これは、「A 為二B 所レC（ABのCする所と為る）」という「受身の公式」で、「AはBにCされる」と訳す、型にはまった表現である。漢文の場合、こうした型にはまった句法のポイントを、知識として持っているか、それに気づくことができるかが、得点力の大きな分れ目になる。

「冥官」と「追議」には（注）がついていることもあり、「為 冥 官 所 追 議」は、「為三冥 官 所二追 議一」と返り点がついて、「冥官の追議する所と為り」という読み方しかあり得ないことになる。それがわかれば、答はズバリ①しかない。つまり、この設問は、「為…所…」の受身の公式に気がつけばイッパツで答が出るレベルの問題だということなのである。

意味も、①は、「蛇がいて、嚙んで人を殺し、冥界の裁判官に生前の罪を裁かれ、判決は死罪に相当した」となって、スムースであるが、②～⑤はいずれも、ほとんどまともな訳文にならない。

②は「蛇がいて、嚙んで人を殺そうとして、冥界の裁判官に生前の罪を裁くことをするのは、死罪に相当するのに従う」。何を言っているのかわからない。

③は「蛇がいて、嚙まれて殺された人は、冥界の裁判官になって生前の罪を裁くところは、死罪に相当するのに従う」。？？

④は「蛇が嚙むことがあれば殺す人は、冥界の裁判官が生前の罪を裁くところのために、死罪に相当するのに従う」。？？

⑤は「蛇がいて、嚙まれて殺された人は、そのために冥界の裁判官が生前の罪を裁くところであって、判決は死罪に相当する」。？？

正解　30　①　（6点）

問3　訓点のある傍線部の解釈の問題。　基本

傍線部B「誠 有レ罪、然 亦 有レ功、可二以 自 贖一」の解釈として最も適当なものを選べ。

返り点も送りがなもついているのであるから、書き下せば、「誠（まこと）に罪（つみ）有（あ）り、然（しか）れども亦（ま）た功（こう）有（あ）り、以（もつ）て自（みづか）ら贖（あがな）ふべし」である。とくに難解な語はなく、句法上のポイントもない。

「誠に罪有り」の部分については、①・②・⑤は間違っていない。③の「結局は」も微妙であるが、「結局は」と言うからには、「遂に」などのほうが的確であろう。④の「もし～としても」は、実は「誠に…ば」あるいは「誠し…ば」と読んで仮定条件になる用法が「誠」にはあるからであろうが、「罪有らば」と読んでいないので、無理がある。

「然れども亦た功有り」の「功」は、このあと、冥官に「何の功なるか」と問われて蛇が答えている内容から考えて、①の「仕事」、③の「腕前」、④の「功名」、⑤の「あなたの功徳」はいずれも間違いである。これは、②の、蛇自身の「功績」を言おうとしているのである。ここで正解は②になる。

「以て自ら贖ふべし」は、まず「自ら」は「みづから」であり「自づから」の意にとっている③・④は間違いである。⑤も「私の」となっているが、「自らの」ではないので間違っている。また、「贖う」は「つぐないをする」ことであるから、①の「帳消し」、③の「埋め合わす」、④・⑤の「許す」は、いずれも間違っている。

正解　31　②　（6点）

問4　空欄補充および理由説明の問題。（i）標準　（ii）標準

本文中の二箇所の空欄 X にはどちらも同じ語句が入る。その語句を(i)のうちから選べ。また、(i)の解答をふまえて、本文から読み取れる蛇と牛に対する冥官の判決理由を説明したものとして最も適当なものを、(ii)のうちから選べ。

(i)　空欄に入る語句の問題。

選択肢には送りがなが省かれているが、読んで、意味を考えてみると、

①「免るるを得」＝（罪を）免れることができた。
②「還らず」＝帰ってこなかった。
③「功有り」＝功績があった。
④「死を得」＝死罪を受けた。
⑤「病を治す」＝病気を治した。

のようになる。

ところで、(ii)が、この(i)をふまえての、「蛇と牛に対する冥官の判決理由」を問う質問になっているのであるから、この(i)の空欄に入る語句は、判決、

もしくは判決の結果だということになる。そう考えると、答は①か④であろう。つまり、死罪を免れたのか、死罪になったのかである。③の「功有り」や、⑤の「病を治す」は、蛇や牛が、死罪を免れるために「訴」えている内容であって、判決とするのはおかしい。

蛇の訴えを、「吏」が「考験（＝取り調べること）」したが、「固より」蛇は「誣ひ（＝いつわって言う）ざれば」と述べられている以上、蛇の（牛の）訴えはそのとおりで、認められたのであろうから、当然「死罪を免れた」のである。**正解は①。**

②の「還らず」も、④の「死を得」の結果のようになるから間違いである。

(ii) **判決理由の説明の問題。**

蛇や牛は「死罪を免れた」のであるから、①の「死罪とする」、②の「冥官に留め置き罪を償わせることとする」は消去する。③の「人の病気を治すことで罪を償わせることとする」も、本文からはそこまで読みとれないし、③は「将来は人の命を救う可能性は残っている」もキズである。

冥官が蛇や牛を死罪にしなかったのは、「某に黄有り、病を治すべし、活かす所已に数人なり」「我も亦た黄有り、以て病を治すべし、亦た数人を活かす」という訴えを認めたからである。この訴えの内容がとらえられているのは④である。

⑤は「人を殺してきたというのは誤解で」「善行を積んできた」が間違いである。

正解　(i) 32 ①　(ii) 33 ④　（各5点）

問5　傍線部の理由説明の問題。　標準

傍線部C「冥官大怒」とあるが、その理由として最も適当なものを選べ。

冥官は「大いに怒」って、「之（＝その人間、あるいはその人間の言ったこと）を詰」って、こう言っている。「蛇黄・牛黄皆薬に入ること、天下共に知る所なり。（このあとは、次の**問6**なのであるが）汝は人たり、何の黄か之れ有らん」、つまり、人間には、蛇や牛のような「黄」がないにもかかわらず、蛇や牛が死罪を免れたのにならって「黄」があると言ったりしたことを、詰っているのである。**正解は⑤。**

①は、人にも「黄」があることを「理路整然と説明され、獄吏の言葉が論破されそうになった」としている点が、本文にそぐわない。

②は、「蛇も牛も人もみな」が「体内に『黄』があるのを良いことに言い逃れ」するとしている点が間違い。人には体内に「黄」はないのだし、蛇や牛は単純な「言い逃れ」ではない。

③は、「体内に『黄』が欲しいと、獄吏にわがままばかりを言うその人」が間違い。そのようなことは本文にない。

④は、「その人は『黄』の用い方を知らずにあいまいなことを言って、人を救わずに殺してばかりいる」が間違い。これも本文にない。

正解　34　⑤　（7点）

問6　返り点の付いた傍線部の書き下し文の問題。　標準

傍線部D「汝為レ人、何黄之有」の書き下し文として最も適当なものをつ選べ。

問2の、返り点と書き下し文の組合せ問題に加えて、もう一問、単独の書き下し文問題が出るケースはきわめて珍しく、この一問分で、全体が問7までになったのであろう。

さて、これも、句法のポイントに気がつけばイッパツで正答が出る問題である。

「何 A 之 有」という形は、「何のAか之れ有らん」と読み、「何のAがあるだろうか、いや何のAもない」と訳す、反語の型である。これに気がつかないと選択肢の意味を一つ一つ見てみるしかなくなり、非常に面倒なことになるのであるが、気がつけば答は③しかないことはすぐにわかる。そこが得点力の分れ目である。

「おまえは人間である、何の『黄』があるだろうか、いや何の『黄』もない」という意味で、文脈にもぴったりあてはまる。

ちなみに、「為レ人」は、①のように「人と為り」と呼んで、「人柄・性格」という意味になる重要単語のこともあるが、①は、「おまえの性格は、どちらの黄があるのか」という意味になり、何を言っているのかまったくわからない。

正解　35　③　（5点）

問7　内容と表現上の特色に関する説明の問題。　応用

蘇東坡が獄官に語った話の内容と表現上の特色に関する説明として最も適当なものを選べ。

冒頭の「相手が獄官であることから冥界での裁きの冗談を語って戯れ」までは、すべての選択肢が共通している。

次の部分には、

①・②・④が「黄州に流されたことを踏まえて『黄』を用いた話にしている」

③・⑤が「判決の際に使われた『当』という語を多用した話にしている」

の3対2の配分があるが、これは、「黄」が話のキーワードになっていることからも①・②・④のほうが適当であろう。「当」にはとりたてた重要な

意味はない。

③は、このあとの、「『当』という重々しい裁判用語」が疑問であるし、「蛇と牛の滑稽な寓話」もおかしい。⑤は、「『功』という語を笑い話のキーワードに」とあるが、「功」はキーワードの役目にはなっていない。

①・②・④をチェックしてみよう。

①は、「黄」に近い音の「当」を用いることで、「獄官の罪を執拗に追及する気迫」を表現しているとあるが、「当」にそのような表現効果があるとは考えにくいし、蘇東坡は「獄官の罪を執拗に追及」しようとはしていない。「戯れて」いるはずである。

②は、「黄」が「明るい色彩の語」であることを言っているが、そういう効果が話の中に表れている印象は薄いし、それによって「自己の恨みの気持ちが完全に消えたことをが獄官の心に深く印象づける」というのも、やや違う感がある。蘇東坡は、むろん、獄官を強く恨んでもいないのであろうが、恨みの気持ちが「完全に」消えたと言うのも、「完全に」は首肯できないと思われる。

正解は④。どこに「黄」があるのだと追及されて、「黄(コウ)」はありません、「慚惶(コウ)」があるだけで…と、その男が言った言葉に、「皮肉にもユーモアを込め」ているのである。

正解　36　④　（8点）